

最優秀賞

祖父のマンションと水

土浦日本大学中等教育学校

二年 遠藤 瑠七

わたしの祖父は大手精密機械会社での技術職を退職した後、山梨県山中湖村に小さな中古マンションを購入した。長年様々なカメラの開発業務に従事してきた祖父だが、定年を機会に元々カメラが好きで会社に就職したことを思い出し、大好きな富士山を一年中好きなタイミングに撮れるように、そのマンションを手に入れたらしい。その縁もあり、わたしは両親や妹と共にその富士山麓にある住まいを何度か訪れた。窓から見える山中湖の静かな水面に映る富士山は、時間と共に色を変えていく。その光景は、今も強く残っている。

東京の中心部で生まれ育った私にとって、山中湖での生活は様々な驚きの連続だった。第一に、何と

いっても水道から出てくる水の冷たさと美味しさだ。真夏でも水道から出てくる水が冷たいのだ。東京の水も十二分に美味しいのだが、そこで喉を通す水はまた違った味を持っていた。なぜこんなに水が美味しいのかを知らうと考え、村役場の水道課のホームページで確認した。そこには山中湖村の水道は全て地下水を使用していると書いてあった。富士山やその他近隣を囲む産地の土砂を経由し濾過され、豊富なミネラルを含むその水はいつも飲む水とは違う成分を含んでいるのが水にコクがある理由らしい。冷たい地下水で締められたうどんや、無添加にも関わらず、これでもかという程柔らかいパンのどちらもコクが感じられた。それぞれのお店に聞いたところ、おいしさの秘訣は、やはり水にあるとのお話だった。水とそれを取りかこむ山々による水源かん養は、その土地の名産物を生み出す大きな要素でもあったのだ。水自体が地域経済、ひいては社会生活にまで影響を与えるものと考えたことはなく、驚くと同時に、水の存在の大きさを感じたことを覚えている。私達は水に生かされているのだ。

一方で、祖父のマンションでの水の思い出は楽しいものばかりではなかった。特に冬期の水に関する思い出は辛いものであった。まず、冬にはマイナス20度を下回ることもあることから、たまにしかマンションを訪問しない我々家族は冬になると水道を落とす必要があった。訪問の都度、水道を再開するのは手間がかかることから、マンションに行くときは常にペットボトルの水を購入し、持って行った。お風呂も家に入ることは出来ないことから、近隣の村営温泉施設まで出かけて行った。トイレは都度マンションの共有トイレまで走って行った。こういった山中湖での冬の生活は非常に大変な部分もあったが、私達の日頃の生活の一つ一つにおいて、水がどれほど重要でなくてはならないものかを痛感させられた。

山中湖村での楽しい経験も、大変な記憶も、全てわたしにとっては大切な思い出だ。そしてその横にはいつも美しくて十分な水があった。世界にはその日その日の飲み水を手に入れるのも大変な国がある中、日本では必要な時にいつでも水を手に入れるこ

とが出来た。わたしが住んできた東京や千葉の水は、全て山中湖のような水源地域の人々のお陰といえる。その恩恵を受けている都会で生活する私達は、その水源が今後も持続出来るように行動を起こす義務があると思う。例えば、ふるさと納税のように、自分の居住地でお世話になっている水源地域の自治体に、感謝の意味を込めて個人が寄付を出来るような仕組みがあってもいいのではと思う。全国の小中学校で、水源地のダムの見学をすることも、水源の大切さを楽しい体験として理解する上で非常に有効なのではと考える。私自身は、まずこの夏久しぶりに思い出の地、山中湖を家族で訪れ、水道から出る水をコップで思いっきり飲み干したいと思う。